



富田人形

はじめに

国鉄北陸本線長浜駅から「山本」行バスで約30分、四方を田園に囲まれた北富田（東浅井郡びわ町）に伝えられてきた「富田人形」は、近世末期に成立した義太夫節三人遣形式の操芝居であり、昭和32年8月1日付で県の無形民俗文化財に選択されています。

義太夫節三人遣形式の操芝居は、近世中期に大阪で成立しました一竹本義太夫が貞享元（1684）年竹本座を興して以後「義太夫節」が盛んとなり、当時一人遣であった人形操法も次第に改良されて享保19（1734）年義太夫節三人遣形式が始まる一が、その後の地方への伝播は著しく、特に文化・文政（1804—1830）期以降の地芝居の流行とともに盛行しました。その結果、この形式の操芝居が、現在全国各地に伝わる一人遣・糸操り・カラクリ等様々の操芝居のうち、最も多数を占めています。

県内では、義太夫節一人遣形式の富波人形

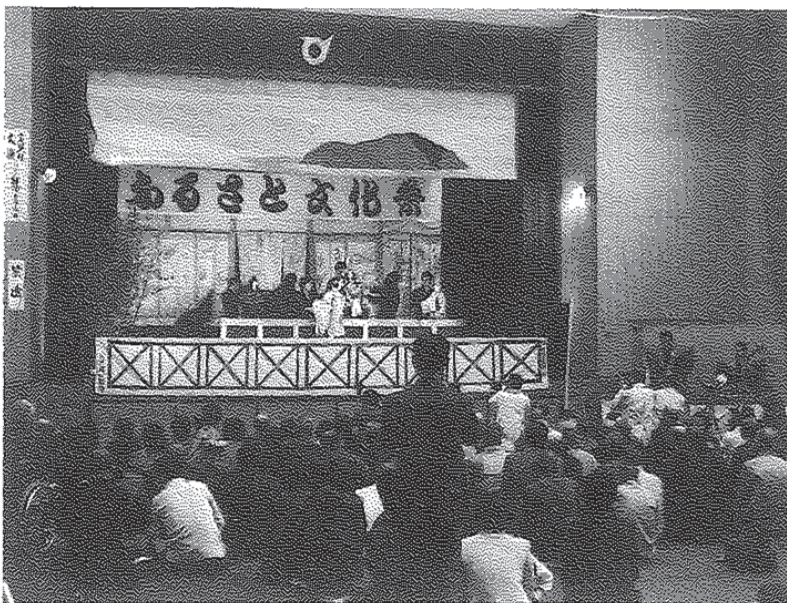
（野洲郡野洲町）、義太夫節三人遣形式の老楽座人形（神崎郡五箇荘町）の存在が報告されています（永田衡吉『改訂日本の人形芝居』昭和44年）が、中絶のままと聞きます。

富田人形は、近世からの伝統をもって現在まで受け継がれてきた県内唯一の貴重な義太夫節三人遣形式の操芝居といえるでしょう。

富田人形芝居の成立と展開

北富田に残る伝承では、「天保6年あるいは10年に、阿波から巡業に来ていた人形芝居の一座が、北富田において雪にふりこめられ興行不能に陥って帰りの路銀の代償として、人形のカシラや道具のたぐいを残していった」（早崎観緑『富田人形調査報告書』昭和45年）のが富田人形のはじまりだといえます。地方の操芝居の起源を示す伝承によく見受けられる型の1つですが、これを裏付ける文書類は全く残っていません。

では富田人形は、いつ頃成立したのでしょうか。現存する人形の肩板やカシラ等には、文化12（1815）年、嘉永3（1850）年、安政6（1859）年等の年紀があり、また製作者や使用者が記した墨書銘には、「吉田文吾」関係8点、「吉田金吾」関係5点等がみられます。この吉田文吾は、「吉田文吾才工人右造」とカシラ内銘にあるように、天保末年に没した大阪の人形遣い三代目文吾と考えられ（右造は文吾の初名）、吉田金吾については、文吾の子で、人形の手内銘に「大阪桐竹門蔵 干時嘉永五年子五月晦日」の墨書銘もあることから、嘉永4年

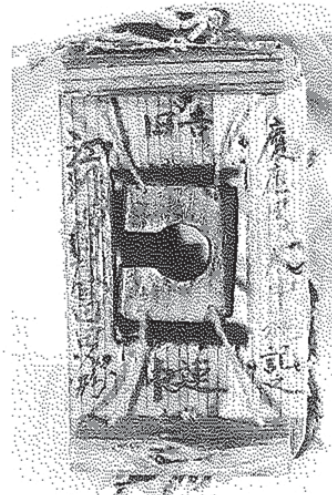


富田人形芝居（昭和56年11月8日）

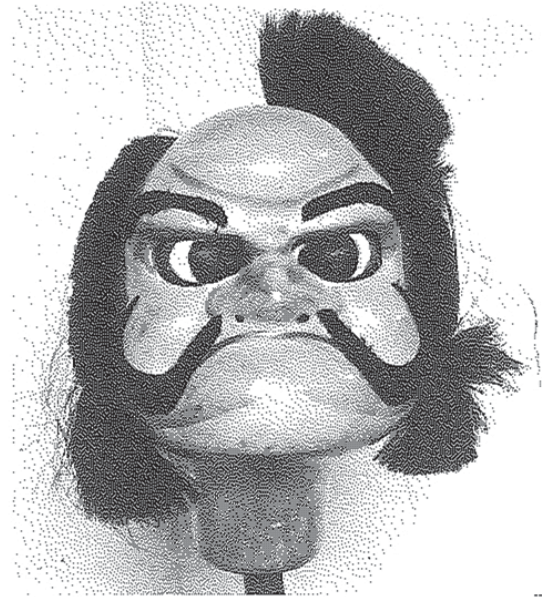
2月の改名（二代目金吾→三代目桐竹門藏）前後の時期を中心に富田人形の成立に関わっていたかと推定されています。但し、「文吾」「金吾」墨書銘の場合、明治16年に没した三代目金吾（二代目金吾の兄）の初名である「豊松国三郎」の墨書銘をもつ人形切胴帳紙もあり（初名一天保期頃一の後、吉田国三郎、吉田文吾、更に明治4年頃より吉田金吾と改名）、この人形遣いのものも含まれている可能性があります。この三代目文吾、二代・三代目金吾らは、大阪の人形遣いですが地方の操芝居の成立・中興に多く関わっています（例えば、真桑人形—岐阜県本巢郡一、黒田人形—長野県下伊那郡一、太田切人形—同県上伊那郡一）。彼らが北富田に足を運んで指導にあたったとしても何ら不思議はないわけです。

しかし、これら墨書銘をもつ人形のカシラや肩板・切胴帳紙自体が、本来可動性を有する文化財である以上、これらの製作者・使用者名の墨書だけで富田人形と文吾・金吾らとの結びつきを結論づけるのは危険かもしれません。従来、「金吾」墨書銘のうち、人形切胴帳紙に天保6（1835）年・同14年の商家の大福帳（「屋善藏」の墨書）を利用したものがあり、この善藏なる商人を北富田の者として、金吾と北富田を結びつける試みもなされてきましたが、これも北富田の商人とする史料をもち得ていないのです。

ただ、富田人形は、慶応末年までには、吉田連中の指導を受けて、すでにかかなりの技量をもつ操芝居集団に成長していたと思われま。そのことは、慶応4（1868）年の墨書銘をもつ人形の肩板に「慶応四戊辰中龜記之」「江州浅井富田人形」「吉田連中」とあることよって推測できます。つまり単なる農民の余暇における慰み程度の段階でこのような「富田人形」といった呼称を使用するとは考えられず、そこに技量の相当の向上ひいては操芝居集団としての充実があったかと考えられるのです。それを指導したのが「吉田連中」で



◀慶応四年の墨書をもつ人形の肩板



▼富田人形のカシラ「与勤平」(10)（カシラ内部に「文吾才工人右造」の墨書がある）

あったのでしょう。

その後の富田人形集団の展開を知る数少ない史料に、富田人形共遊団所蔵の「人形入浄瑠璃出稼＝付御願書」という4丁よりなる明治7（1874）年9月9日付滋賀県令あて申請書があります。この申請の中に、「私共義農業透間＝従前~~が~~人形入浄瑠璃吉田座と唱え出稼仕居候」とし、今後も「本業透間為渡世他村其外諸方之出稼仕度存候御免許被成下度奉願上候」旨の文言がみられ、少なくとも明治初年には富田人形が、操芝居集団としての充実（「吉田座」）にともなって、他地域へ興行にでていたことを知ることができます。

明治7年以降昭和初期までの富田人形の推移を伝える史料もまた全く欠落していますが、いま述べた申請書末尾に県からの「書面之趣

ハ願出ニ不及他之管地え出稼之節は寄留証所持可致義と可心得事」という朱書された回答があり、また明治中期の富田人形社中の経済基盤が安定している（明治13年から18年にかけて、人形社中あての金銭の借用書の控が6丁12件あり、座員に融資できる経済基盤があったことが推定できる）ことから、その後も農閑期の他地域への興行は続けられていたのではないかと考えられます。

富田人形のカシラについて

富田人形共遊団には、現在47個のカシラが伝存しています。数からいえばそれ程多くはありませんが、近世・近代を通じ何度かにわかれて流入したらしく、時期の異なるカシラの佳作が多くみられます。

昭和32年に県費の補助をうけ、30個のカシラが解体修理されましたが、この過程で若干前述したようにカシラの内部に残された銘が明らかになり、早崎観縁氏によって報告されています（前掲『富田人形調査報告書』）。これによりますと、吉田文吾関係4点（後掲の表番号3・10・20・30）、吉田金吾関係1点(31)のほか、「鳴州」（近世中～後期阿波の人形師）

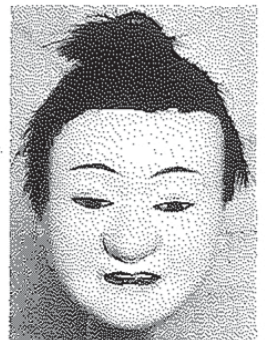
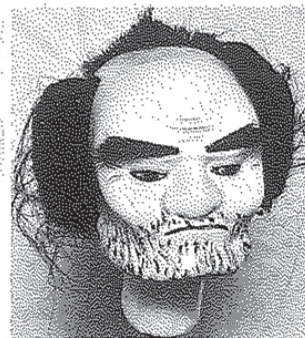
の製作銘(34)、「大江幸」（天保期頃の大江幸三郎か安政期頃活躍した大江幸造かは不明、ともに人形師）の焼印(29)、近松座（明治45年～大正3年の短期間大阪で興行した人形座）の所蔵印(21)があったようです。この他、カシラに付随する胴串に残された銘には、大正・昭和初期に活躍した阿波の人形師天狗久（吉田久吉）の製作銘(47)等もみられ、富田人形カシラの製作年代の多様さを示しています。

髪については、修理段階で全てカツラに直されていますが、植毛をしたカシラが4点

あったことも報告されています（6・18・28・41—『人形「頭」の研究』昭和29年11月28日齋藤清二郎氏指導・共遊団所蔵による一）。植毛形式は、18世紀を中心に使用されていたもので、これらのカシラも貴重なものといえましょう。

また胴串の形式においても、胴串とカマとを別材でつくり、皿の部分に差込んだ所謂「差込」形式のものが、現状でも24点あり（修理時に「共木」形式に改変されたことの明らかなカシラを加えると更に多くなる）、これも基本的には近世の形式と考えられています（カシラの機巧や構造の時期的展開についてはいまだ十分な研究蓄積はなく、現在のところ、大阪市立博物館が館蔵資料集3『文楽人形かしら』昭和51年に示した形式把握が最もまとまったものであり、本稿も基本的にこの把握に則っている）。

これらを考えあわせると、富田人形のカシラは、多様な製作年代をもちながらも、その5分の3以上が近世～近代初頭に製作されたものとみなしてよいでしょう。カシラの製作時期と北富田への流入時期にあまり大きな異



▲「人形入浄瑠璃出稼ニ付御願書」（部分）と富田人形のカシラ（上中央より18・31 下左より41・3・20）



▲富田人形のカシラ「娘」(28)
(修理前は、植毛形式であった)

同がなければ、これらのカシラは、この時期の富田人形の隆盛ぶりを示していることとなります(各々のカシラには役柄があり、首の多さは役柄の豊富さ、ひいては上演外題の多さにつながります)。

一方、これらのカシラをウナヅキ(人形の顔が上下に動く仕掛け)操作法からみますと、トの字形の竹栓を胴串の溝にそって上下させる引栓式と、胴串から出ている角状のものをひく小猿式という、基本的には大阪系と考えられている形式が圧倒的に多く、阿波系のブラリ式のものはありません。また近代の阿波系人形の特徴である鉄砲差しの胴串も明確なものは1点しかみられません(35)。

現存するカシラの構造からいえば、阿波の人形座の残した人形を起源とするという北富田の伝承とは別に、富田人形はその成立の初期から多くの大阪系のカシラを有していたと考えられ、吉田文吾・金吾らの指導を受けて、近世末から近代へと大阪系の義太夫節三人遣いの芸風を培っていたと考えてよいでしょう。

なお、富田人形カシラの造型や役柄についてはすでに紹介されています(前掲『富田人

形調査報告書』等)が、ここで述べたカシラの機巧や胴串については報告がないため、今回富田人形共遊団のご好意により調査させていただいた結果の一部を表として後掲しておきます。

富田人形の現状

日中戦争、太平洋戦争とうちつづく戦時体制下に一旦中絶を余儀なくされた富田人形は、昭和20年代中頃には、農村の娯楽として、復活しました。その上演は、出演を依頼された時点で数日間練習して、敬老会やリクレーシヨンの場で舞台をつとめる形態であったということで、やはり農閑期を中心としていたようです。

現在、全国の民俗芸能を伝えている人々の共通の悩みは、後継者の問題でしょう。富田人形共遊団もまた例外ではありません。共遊団の構成も世代交代し、昭和56年8月現在で23歳から40歳までの14、5人を中心メンバーとし、月2～3回の練習には常時7、8人が参加する程度だといえます。また、上演可能な演目も減少し、昭和28年1月24日付の『郷土芸能調査報告』の写(共遊団所蔵)には、

- 1 絵本太功記 尼ヶ崎の段
- 2 御所桜堀川夜討 弁慶上使の段
- 3 堀川波鼓 お俊伝平猿廻しの段
- 4 朝顔日記 宿屋の段
- 5 伽羅先代萩 政岡忠義の段
- 6 伊賀越道中双六 平作住家の段
- 7 艶容女舞衣 三勝平七酒屋の段
- 8 仮名手本忠臣蔵 勘平切腹の段
- 9 傾城阿波の鳴門 順礼歌の段
- 10 壺坂靈験記 お里沢市壺坂寺の段

と10の外題が上演演目として掲げられていたのに対し、現在実際に上演できるのは1の『絵本太功記』十段目尼ヶ崎の段だけでもいいです(ただ、従来どおりの操り方ならば、練習すれば、2・4・5・9も可能かもしれないとのこと)。

このような状態の打開策として、昭和56年

富田人形は2つの新しい展開をみせました。その1つは、財団法人文楽協会の技芸員の指導を受けはじめたことです。これは、指導者もなく床本の筋を追って操るだけという練習の行き詰まりの打開をはかり、後継者の意欲の増進を期したものでしょう。この動きが富田人形の今後にどのような形となってあらわれてくるのかわかりませんが、富田人形が「富田文楽人形」としての第一歩を踏み出したことは事実です。

今一つの新しい展開は、定期公演化への歩みです。従来の依頼された時だけという姿勢から主体的上演への転換といえましょう。その第1回が、昭和56年11月8日「びわ町ふるさと文化祭」という形で実現しています。冷たい曇の降る天候のなか、びわ町環境改善センターの講堂にあつまった100人以上の観客を前に、『絵本太功記』十段目の前半が上演されました。この第一回定期公演では、文楽協会技芸員の指導の下、永らく北富田に育たなかった太夫が一人誕生しています。定期公演を重ねることによって、一人でも多くの後継者が育っていくことが期待されます。

むすびにかえて

新しい展開をはじめた富田人形は、更に隣接地域や北富田の婦人等を加えて3組程度のグループをつくる働きかけも考えており、また他県の操芝居との交流もすすめようとしています。すでに後者については、同じ師系（文吾・金吾）をもつ岐阜県の真桑人形との共演が決まっています。

このような富田人形の活性化とともに、忘れてならないのが、共遊団所蔵の貴重なカシラや衣裳、道具立類の修理の問題です。昭和44年以来大切に取蔵庫に保管されていますが、カシラの引き糸が切れているもの、内部機巧が欠損しているもの等、カシラや衣裳に特に傷みが目立ってきています。これは、財源の少ない現在の富田人形共遊団の大きな課題の一つといえましょう。貴重な文化財の保存・修理のため、なんらかの対策・助成が望まれます。

最後になりましたが、この紹介文作成のため、調査の機会を与えてくださった富田人形共遊団長阿部秀彦氏をはじめ共遊団の皆様、カシラ内銘等のご教示をいただいた早崎親縁氏に感謝をいたします。（西岡直樹氏提供）

富田人形のカシラ一覧 一法量・機巧・胴串一

	名 称	面 長	面 幅	機 巧	胴 串
1	文 七	12.3	7.6	アオチ・寄目・横目	小猿式・小猿4・共木
2	口 あ き 文 七	13.7	9.0	アオチ・寄目?・横目?・口開き	小猿式・小猿4・差込
3	大 団 七	14.6	9.4	立マユ・寄目・口開き	小猿式・小猿4・共木
4	検 非 違 使	※13.8	9.1	アオチ・寄目・口開き	小猿式・小猿2・共木
5	ねむりの検非違使	13.0	8.6	ネムリ	小猿式・小猿1・差込
6	小 団 七	13.3	9.5	横目	小猿式・小猿2・差込
7	団 七	13.0	8.9	アオチ・寄目	小猿式・小猿2・共木
8	動 き の 源 太	13.2	8.1	アオチ・寄目	小猿式・小猿4・共木
9	源 太	11.4	6.8	なし	引栓式・小猿3・差込
10	与 勘 平	13.7	9.5	寄目	引栓式・小猿3・差込?
11	金 時	※13.7	※9.4	なし	引栓式・差込
12	又 平	13.4	8.5	マユ下り・口開き	小猿式・小猿2・共木

	名 称	面 長	面 幅	機 巧	胴 串
13	沢 市	12.6	8.1	口開き	小猿式・小猿1・差込?
14	三 枚 目	11.7	8.6	口開き	小猿式・小猿1・共木?
15	か に	10.8	10.3	鼻動き・口開き	小猿式・小猿1・差込
16	鬼 一 ?	12.6	8.0	アオチ	小猿式・小猿1・差込
17	舅	11.4	7.2	寄目	小猿式・小猿2・差込
18	た け う じ	11.0	6.8	なし	小猿式・差込
19	斧 右 衛 門	11.0	※ 8.3	なし	引栓式・共木?
20	子 役	※11.1	7.1	なし	小猿式・差込
21	鼻 動 き	13.3	8.4	返り目・鼻動き	引栓式・小猿3・差込
22	三 番 叟	※11.9	7.8	ネムリ・口開き	引栓式・小猿2・差込?
23	子 役	※10.8	6.4	なし	小猿式・差込
24	子 役	所 在 不 明			
25	梨 割 り	12.2	7.9	なし	ノド木直立
26	子 役	※ 8.6	6.3	なし	胴串欠損
27	端 役	11.5	8.6	なし	胴串欠損
28	娘	※10.5	6.4	なし	引栓式・共木
29	娘	※11.1	7.0	なし	小猿式・共木
30	老 け 女 形	※11.2	7.5	ネムリ	小猿式・小猿1・共木
31	老 け 女 形	※11.6	7.3	ネムリ	小猿式・小猿1・差込
32	娘	10.7	6.5	なし	小猿式・共木
33	老 け 女 形	※11.5	7.5	なし	小猿式・共木
34	八 汐	※11.5	7.5	寄目	引栓式・小猿2・差込
35	娘	※10.8	6.7	なし	小猿式・差込
36	莫 耶	12.2	7.9	顎落ち(最大14.0)	小猿式・小猿1・共木?
37	お 福	※11.6	8.4	なし	引栓式・差込?
38	が ぶ	11.3	7.6	返り目・顎落ち(最大12.7)	小猿式・小猿2・差込?
39	老 け 女 形	※11.5	6.7	返り目	引栓式・小猿1・差込?
40	婆	※11.9	7.5	ネムリ	小猿式・小猿2・差込
41	婆	11.7	7.4	なし	小猿式・差込
42	三 枚 目	9.9	7.4	なし	ノド木以下欠損
43	猿	9.4	6.5	なし	ノド木直立
44	猿	9.4	6.2	なし	ノド木直立
45	平 作	12.8	7.7	口開き	小猿式・小猿2・共木
46	定 之 進	13.2	8.5	アオチ・口開き	引栓式・小猿2・共木?
47	動きなしの源太	12.1	7.6	なし	引栓式・差込
48	子 役	※10.2	6.1	なし	小猿式・共木

1. 本一覧は、昭和56年8月3日、4日両日に実施した富田人形共遊団所蔵の人形カシラ47点の調査結果の一部をまとめたものである。
2. 本一覧の通し番号は、各人形首に付されているもの、名称は『富田人形調査報告書』（昭和45年）のものに原則として従った。
3. 本一覧の法量・機巧・胴串は現状についてのものである。なお、法量の※はカツラを含む法量。